

夏季研修 part3

○音楽実技講習会 8月21日(木)野洲中学校

中学校、小学校合わせて18名の参加でした。講師は、京都橘大学 佐敷 恵威子教授。「子どもも先生も楽しくなる音楽科の授業(基本のき?)」というテーマの講義と実技でした。音楽の本質である「楽しむ」ということを、佐敷先生自らが体現されていました。講習会が進むにつれ、受講者が楽しみながら歌ったり、演奏をしたりしている様子が見られ、指導者が楽しむことが子どもたちを楽しませることにつながることを学びました。

歌唱(手のひらを太陽に・いつでもあの海は)・合奏(茶色のこびん・ラバースコンチェルト)指導に関しては、子どもが「やってみたい」「これならできそう」という思いを持たせ「こどもとともに学びをつくる」の授業の流れを教えてくださいました。また、中学校との系統を意識した発声方法(軟口蓋を開く)やリコーダー指導(3年生の最初の指導の重要性)では、指導すべき内容を分かりやすく説明していただきました。その他にも、音楽会の楽曲選択(教科書に掲載されている教材をいかす)や発達的な配慮を要する子どもへの指導など多くの内容を教えてくださいました。



(講師の佐敷恵威子教授)



○就学前教育講座② 8月25日(月)中主防災センター

保育園・こども園・幼稚園の先生20名と小学校の先生3名の計23名の参加でした。

「保幼小連携の推進を目指して～幼保小の架け橋プログラム事業の取組から～」という演題で、昨年度まで、3年間文部科学省の指定を受けておられる彦根市立城東小学校の木村章子先生、中川可奈先生にお話ししていただきました。

昨年度の1年生の取組の紹介を「園から学ぶ『学びをつなぐ』とは」という視点で話していただきました。大切にしたいことを3つ挙げられました。

- ①思いを安心して出せる場・関係性作り
- ②子どもの思いに沿った時間設定
- ③思いが繋がっていく単元計画

次に、3年間の小学校と4園の歩みを紹介していただきました。期待する子どもの姿からスタートし、共通シート・ぐるぐるシートの活用に至るまでの流れを。

最後は各学区のグループごとに「強み」「弱み」を思考ツールを使って交流するという演習でした。各校園の「明日からの一歩」につながる研修でした。



(中川先生から昨年度の取組紹介)



(木村先生とグループ演習)



SNS 等での誹謗中傷が少なくないこの頃です。
その実態をこの 20 年ほどの国語科の変遷と関連付けて書いている
堀 裕嗣さんの記事を紹介します。

受信者の意図こそが優先される？

かつて国語科の授業で「気持ちが悪くなるほど気持ちが問われる」と国語教科調査官に揶揄された時代がありました。「ごんぎつね」や「大造じいさんとがん」に 15 時間以上の時数をかけて、ごんや兵十、大造じいさんから残雪の気持ちまで問う授業が展開されていたのだから、その揶揄も理解できなくはありません。

「文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改める」旨が教育課程審議会から発表されたのは 1988 年 11 月のことです。現実的な言語教育を優先すべきだという流れは 2002 年の学習指導要領改訂につながっていきました。いわゆる、「伝え合う力」の学習指導要領国語科が、表現・理解・言語事項の二領域一事項から「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「言語事項」と三つの活動領域と言語事項とに改定された学習指導要領の改定です。「ゆとり教育」の改定と言った方が分かりやすいかもしれません。十年をひと昔とするなら、ほんのふた昔前のことです。

しかし、20 年という月日は、国民の言語感覚、特に若者の言語能力を解体するには充分すぎる時間だったと今にして思われます。この 20 年で人々は「文脈」というものを読まなくなりました。いや、「文脈」というものがあることさえ気づかなくなったと言った方がいいかもしれません。思えば、当時の教育界を席卷した「伝え合う力」の国語教育は、子どもの「主体性」の名のもとに「目的に応じた言語活動」を称揚するものでした。自らの目的に応じて話す、自らの目的に応じて書く、自らの目的に応じて読む、というわけです。今から振り返ると、この「主体性」と「目的」という言葉が曲者でした。すべての人が尊重されるべきという社会的気運とあいまって言語活動においても「発信者の意図」よりも「受信者の意図」こそが大事であるという気運を徹底して醸成したのです。言うまでもなく、その結果が X (旧ツイッター) をはじめとする昨今の SNS の現状です。そこには、語彙等の意味が分からないのは分かるような表現がなされていないからだとか叫んだり読み取りでの勘違いを間違っていないと言い張ったりするような議論があります。まったくもって無知な子どもの自己主張のように思われます。



知らず知らずに培われていたものとは？

おそらく 2002 年の国語科学習指導要領の改定は成功とは考えにくい。この 20 年間は、「文学的な文章の詳細な読解」ばかりか、いかなる文章をもまともに読むことを忌避する心性をもたらしただけではないでしょうか。当時の国語改革は、「文学的な文章の詳細な読解」の代わりに、「自分の考えをもち、論理的に意見を述べる力」「目的や場面に応じて適切に表現する能力」「目的に応じて的確に読み取る能力」や「読書に親しむ態度」の育成を重んじたはずですが、この四世紀半で日本人はかつてと比べてそうした能力を高めることができたでしょうか。現在の SNS のやりとりは、当時大々的に喧伝された「伝え合う力」が発揮された姿を見せているのでしょうか。「借り物の考えを自分の考えのように錯覚し感情的に論破しようとする能力」や「自己都合に応じた自己欺瞞的に表現・理解する能力」がやたら発揮されるものになってはいないでしょうか。

しかし、それは実は、2002 年学習指導要領の理念が間違っていたということを意味するわけではありません。改定と言うものはこれまでの悪しき慣習を除き、今後求められる成果を直接的に得ようとするものです。それ自体は正しいことでしょう。ただ問題だったのは、大きな改定をするときに、その改定によってこれまでの慣習が知らず知らずのうちに培っていた何かが失われる可能性がないかと考えることを、それを真剣に検討することを怠ったことです。どこかの政府が前政権を法的に抹殺するのと似ているようなことだったのかもしれません。

おそらくあの「文学的文章の詳細な読解」は、ごんや大造じいさんの心情を読み取るということに名

を借りた「文脈を読む」ということに寄与していたのではなかったでしょうか。あの時代の国語教育で行われた「詳細な読解」は決して「知識」を教えたものではありません。スマホも、タブレットもないGIGA などという発想のかけらもない時代です。辞書が毎回机に置かれていたわけでもない。要するに「分からないからすぐ調べる」ということができない状況で授業が行われていたのです。とすれば、子どもは分からない言葉が出てくると、この文脈から言ってこの言葉はこういう意味なのではないかと想像しながら読み、それをもとに解釈を創造していく営みを強いられていました。それが無意識のうちに子どもたちの「文脈を読む」力を鍛えることにつながっていたのです。

あの「詳細な読解」は少なくとも人の行動の裏には心情があって理由があるということをお教え続けていたのではなかったのでしょうか。

あの「詳細な読解」は少なくとも人の行動や心情は複雑であるということをお手を変え品を変えお教え続けていたのではなかったのでしょうか。あの「詳細な読解」は少なくとも他人の気持ちを安易に決めつけてはならない、想像に想像を重ねなければ理解できない、想像に想像を重ねてさえ理解できない部分が多いということをお教え続けていたのではなかったのでしょうか。

おそらくあれだけ軽視されてきた国語の授業の「文学的な文章の詳細な読解」は、確かに国語科としての言語教育にはほとんど無意味ではあったが、人を「大人」にしていくための、結構大きな別の意味を持っていたのではないのでしょうか。最近の世の中の、特に SNS 上のあまりにも単純な単線思考を眺めていると、どうしてもそんな気がしてくるのです。

日本人が日本人としてまっとうに、まっとうにというよりも普通に育っていくためには、例えばちょいとひどいいたずらをしたくなる小ぎつねの心情を想像してみることや、猟銃の筒口から出る「青い煙」の象徴性をああでもないこうでもない長時間議論し続けた結果として「結局結論出なかったね…」とそのもやもやに浸るとか、議論の後に先生のまとめの話を聞いて「どうしても納得できない」と食い下がるとかというような経験が必要なのではないのでしょうか。それが「言霊言語観」への入り口に至る通過儀式として機能していたのではないのでしょうか。

それが目的に応じて情報を読み取るなどといったことがもてはやされ、レポートを書くためにこの文章を読むのだ、プレゼン作成の資料として複数の資料を比較して読むのだばかりするようになって、完全に「道具言語観」に墮としてしまいました。今では言語が道具であることを疑う若者を見つける方が難しくなっています。言語が道具であるとすれば、その道具を用いる発話者は「動かない人」「変わらない人」、即ち「完成された人」ということになってしまいます。つまり、自らの「主体性」のみを発揮し、自らの狭い「目的」だけに依拠して他者の表現を曲解することさえ許されるという感覚に墮としてしまうのです。いや、多くの人たちは自分が曲解していることにさえ気づかない有様にまで墮としてしまっています。

結果、X（旧ツイッター）の 140 字程度の文章の読解もままならないのに、自分は一端の者だということだけは信じて疑わない、ひどくバランスの悪い人間になってしまいました。そう感じられてなりません。

細部に配慮できる？

「発信者の意図」を最大限に尊重しつつ文章に対峙するという構え、筆者が施した細部にまで配慮して言語操作しようとする意識、これが「文脈を読む」ということなのです。自らの目的に応じて情報を活用しようとするのはこれができてからの話です。誤解を怖れずに言うなら、発信者の意図を文脈から読もうとする構えをもたぬ者には、実は発信する資格がないのです。

国語学力においては、表現活動にしても理解活動にしても、細部にこだわる人ほど学力が高いと言えます。「文脈を読む」という訓練は、単なる語彙の問題、知識レベルの問題を超えて、どこまで細部に配慮できるかという構えをつくることに資するのです。



（「みんなの教育技術」より）

堀 裕嗣 プロフィール

ほり ひろつぐ

公立中学校教諭

「研究集団ことのは」代表

まなび野洲チャレンジ！ 35

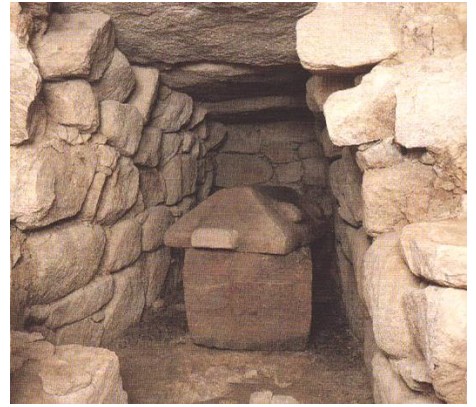
今回は、この問題です。正しい答えの番号はどれでしょう。
答えは最下段に載せています。

古墳時代の野洲市には、強大な勢力をもった一族がいました。その一族は、大岩山の麓から周辺の平野部にかけて大規模な古墳をつくり続けました。それらの古墳の集まりが大岩山古墳群です。

まるやま かぶこやま てんのうやま
円山古墳、甲山古墳、天王山古墳の3基は、隣接しているた
め、桜生史跡公園として保存公開されています。

円山古墳と甲山古墳の家形石棺は〇〇の凝灰岩をくりぬいて作られており、出土品は冠片、太刀の金具、金糸やガラス玉など多種にわたります。

〇〇とはどこでしょうか？



古墳内の家形石棺

- ①新潟県糸魚川 ②奈良県橿原 ③島根県出雲 ④熊本県阿蘇

おすすめの図書



『令和型不登校対応マップ ゼロからわかる予防と支援ガイド』
千葉 孝司 著 出版社 明治図書出版

理由も多様化した令和ならではの不登校 学校に出来ることは？
近年また増加傾向にあると言われる不登校。コロナ禍やSNSの影響など、不登校の原因も社会情勢や環境の変化により多様化してきています。正解がない令和ならではの不登校対応について、教師と子どもの場面別の会話例も入れて解説しました。明日の道標となる1冊です。

作者より 時には考えを白紙に戻し、時には180度転換させ、ゼロから柔軟に本書を読み進めていただけると幸いです。



『教えない授業——美術館発、「正解のない問い」に挑む力の育て方
鈴木有紀 著 出版社 英治出版

表現力、論理の思考力、コミュニケーション力・・・「生きる力」を育むアート鑑賞。

これからますます求められる「主体的に学ぶ力」はどうすれば伸ばせる
のだろう？

芸術鑑賞の手法としてニューヨーク近代美術館で生まれ、効果抜群の学習スタイルとして幅広い学年・教科、さらにはビジネス界にも広がり始めた「対話型鑑賞」の入門書。

★新たな学習法として注目高まる「対話型鑑賞」、待望の入門&実践書。

★実際の授業のやり取りの様子、幅広い教科・分野での実践事例を紹介。

★学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び」を促す手法としても有用。